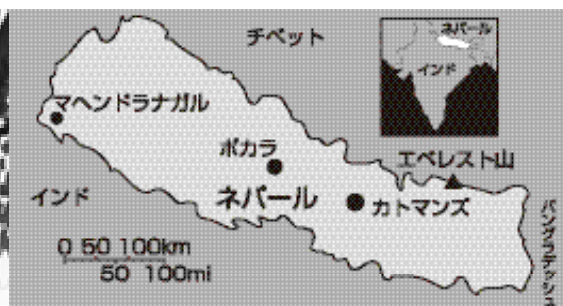


# マジック紀行

「想像できる事は最終的に全てできる！」  
そう信じ切る事こそが私の原動力！  
さすらい人 ルーフ広宣



## in ネパール

公用語 ネパール語  
首都 カトマンズ  
面積 140,800km<sup>2</sup>  
人口 約2,710万人  
密度 192人/km<sup>2</sup>

ネパール初訪問、カトマンズに降り立った私が空港を出た瞬間、異様な光景が広がっていた。鉄格子に黒い顔の人だかりがズラリと並び、こちらに向けて手を突き出し、何やら大声で叫んでいる。その光景を見て、果たして生きて帰れるのだろうかかと戦慄が走った。

ホテルに着くと一晩中、犬の遠吠えが聞こえる。ネパールは野犬が多く、年間150〜200人もの人が狂犬病で命を落としている。

日本を発つ前に東大病院で狂犬病の予防接種を行ったが、4度の接種が必要などところ時間の都合で一度しか受けていなかった。医師には、「もし犬に噛まれたら、狂犬病を発病し、百パーセント死ぬ！」と、言われていた。

そんな未開の地で義兄弟の義を結ぶ人物に出会おうとは誰が想像したであろうか。

飛行中のヒマラヤ峰へ向かう、カトマンズ発ポカラ行き小型プロペラ機は、義兄弟であるカピル氏が私の為にチャーターしてくれた。

開け放たれた操縦席を見ると、操縦士達は皮ジャン、皮手袋に



ゴーグルを着けた重装備である。それに引き替え私達は軽装だ。彼らの重装備の理由をカピル氏に訊くと、「もし不時着したら周りは氷山だから凍死する！」との事。ああ、そうか！と思った瞬間、身震いする。

するとカピル氏は微笑みながら、「大丈夫！ 25分で着きますよ」と言って片目をつむった。

間もなく、キャビンアテンダントから白い綿の玉を二つ手渡された。何に使うのかと思っていたら、カピル氏は、当然の様にその綿を両耳に詰め込んでいた。プロペラ機は肩を並べたヒマヤラの峰々につかまるようにして飛んで行く。

ここで、ネパール国という国名の由来を説明しよう。「ネ」は牛、「パール」は王様だと言う。紀元前、アレキサンダー大王がインドへ侵攻した際、山脈を越えてネパールへ入ろうとした。その時の国王は国を護るために名案を思いつく。

夜になるのを待って、大群をなす野牛の両角に松明をくくり付け、森の中へと放した。それを見たアレキサンダー大王は、この国の大軍が押し寄せて来たと思ひ込み、撤退したと言う。

私はこれを聞いて、これぞ正しくマジックで国を救った史実である！と驚嘆した。見事に国を救った牛たちに感謝し、その後、牛を神様として崇めるようになったそうだ。

ポカラ空港に降り立つと、眼前に高くヒマラヤ峰がそびえ立ち、実に雄壮であった。ホテルに向かう車中から見る景色は、湖畔を左に見ながら菩提樹の大木が何本も道の両側に立ち並ぶ。そこを牛たちがゆっくり歩いていて、人々と同居している様子が何い知れた。



翌朝は、午前3時の出発となった。暗闇の中、車はひた走る。目的地に着くと、案の定、野犬が私の周りにまわり付いて来た。

プロフィール写真を撮る為、急いで衣装に着替え、ヒマラヤ峰を背に立った瞬間、後ろでキヤンキヤンと犬が激しく鳴く声がある。後ろは断崖なのだが、振り返って見ると、コート裾に子犬がぶらさがり、まるで竿に掛かった魚のように、クルクル回っているのだ。どうやら噛みついた牙が布に引っかかったようだ(冷汗！)。



崖から生還した子犬↑

撮影も終えた帰路、カトマンズへは車で7時間の移動となった。山を割った様な山岳地帯のガタガタ道を山奥へと入って行く。

学校帰りの子供が一人、道なき小高い丘を登っていた。すると、まるでイリュージョンの様にその姿が消えた。マジシャンが不思議に思っているとカピル氏は「あの泥山の向こうに家があるのだろう」。なるほど時折、砂煙の向こうに民家らしき物が見える。ネパールの子供達は、毎日3時間位歩いて学校に通うのもあたりまえだと聞き驚いた。

純粋な瞳を輝かせ、私のマジックを見詰めていた子供達を思い出し、こんな話も思い出した。日本とネパールの子供達に写真を見せ選ばせた所、日本の子供はビルや建物の風景写真を選び、ネパールの子供は人々が写っている写真を選んだと言う。

先進国の子供は物に着目し、途上国の子供は人に着目しているのだ！これは大人も同様なのであろう。

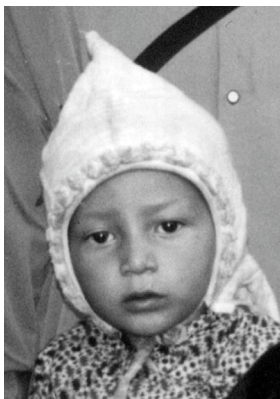
（ルーフ広宣）

今や、釈迦生誕の地のネパールは、改名宣言や数々の賞を贈られた地として、第二の故郷になった。

※2007年9月8・9日  
（東京）日比谷公園大噴水前  
「Nepal Day Festival 2007」  
開催。入場無料。雨天決行。

現在アジアの発展途上国は、日本との連携に頼り発展する事に、希望を見出している。そして、平和への胎動を開始した熱い国々なのだ。それ故、先進国が既に失ってしまったものが、そこにはある。

※釈迦の生誕地の周囲を聖地公園として整備する「ルンビニ釈尊生誕地聖域計画」が立案され、1978年に日本の建築家丹下健三がマスタープランを作成。現在もこの計画に基づき整備が進められている。



（出典wikipedia）